



TITLE:

内村鑑三における師弟関係：斎藤宗次郎『二荊自叙伝』を手掛かりに

AUTHOR(S):

岩野, 祐介

CITATION:

岩野, 祐介. 内村鑑三における師弟関係：斎藤宗次郎『二荊自叙伝』を手掛かりに. アジア・キリスト教・多元性 2006, 4: 1-14

ISSUE DATE:

2006-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57699>

RIGHT:

内村鑑三における師弟関係 - 斎藤宗次郎『二荊自叙伝』を手掛かりに -

岩野祐介

はじめに

内村鑑三はよく知られている通り、無教会主義キリスト教の創始者である。キリスト教において必要不可欠と考えられている教会が、無くてもよい、というその大胆な発想は、欧米キリスト教圏とは異なる歴史環境が生んだ独特のキリスト教である。とはいえ内村自身に「無教会主義」という教派を旗揚げしよう、といった意図があったわけではなかった。教会は生成変化するものであるべきと捉えた内村は、固定化した組織を作ろうとはしなかった。よって内村は正式に自らの後継者を選ぶようなこともせず、むしろ弟子たちに独立させようとしたのである。ゆえに彼の死とともに、その聖書研究会は解散してしまうことになるが、しかしその意志は多くの弟子たちによって受け継がれ、現在に至るまで幅広い分野で多大な影響を与えてきている。

しかし一方では、内村は信仰を個人のものと位置付けていた。無教会という形態も、一人一人の人間が神と直接対面することが重要なものであり、既製の教派教会のように司祭職の人間が仲介するような形では、神に向かっているはずがいつのまにか人間に向かっていることになりかねないという考え方を反映するものである。だがそれならば、内村にとって、信仰者の集団はどのような意味を持つのだろうか。何故個人の信仰は個人という範囲内にとどまらず、他者とつながり、集団を形成しようとするのだろうか。

筆者はこれまで、内村鑑三における個人の信仰と信仰者集団の関係について、聖霊論や教会論の観点から、また彼の聖書解釈に基づく人間観という観点から、考察してきた。本論文では信仰者の集団というテーマの一環として、内村が師弟関係というものをどのように捉えていたのか、という問題を、特に弟子の一人である斎藤宗次郎との関係性を手掛かりに探っていきたいと考えている。

斎藤宗次郎著『二荊自叙伝』⁽¹⁾について

ここで、本論文で扱う『二荊自叙伝』とその著者斎藤宗次郎について少し紹介しておこう。以下は『二荊自叙伝』凡例からの引用である。

(1) 斎藤宗次郎(山折哲雄・栗原敦編)『二荊自叙伝 上下巻』岩波書店 2005。なお、以下『二荊自叙伝』上巻を上巻、同下巻を下巻と表記する。

「一、本書は、斎藤宗次郎による『二荊自叙伝』(全四十巻、生誕から一九三八年十二月二十五日まで)のうち、一九二一年(大正十)元旦から著者が花巻から東京に移住する一九二六年(大正一五)九月三日までを収録したものである。」

「一、『二荊自叙伝』は、著者が自らの日記をもとに執筆したものである。」⁽²⁾

以上のごとく、『二荊自叙伝』は斎藤宗次郎による、自らの日記に基づく自伝である。今回刊行されたのは斎藤による自叙伝の、ほんの一部分に過ぎないということになる。今回の刊行にあたり、何故この1921-1926年という年代を選んだのかについては、編者である山折哲雄と栗原敦の両名が先立って斎藤宗次郎と宮沢賢治との交流に着目した研究を行っていたことと関係していると思われる。この1921-1926年の期間に、ちょうど斎藤は宮沢との交流について記述しているのである。そして1921年は宮沢が花巻農学校の教師になった年であり、1926年は上述のごとく斎藤が花巻を離れた年である。ただし、宮沢との交流は斎藤の全生涯から見れば部分的なものである。栗原も「この自叙伝を提示した人物の像が、『〔雨ニモマケズ〕』のモデル」というが如きイメージに収斂して終わるようなものでない⁽³⁾と述べる。そもそも栗原によれば、斎藤が間違いなく『〔雨ニモマケズ〕』のモデルであるとの確証があるわけでもないのである。

内村鑑三と斎藤宗次郎

続いて、斎藤宗次郎の人となりについて、山折による解題から少し引用しておく。

「斎藤宗次郎は明治十年(1877)花巻市北笹間の曹洞宗の寺に生まれた。…のち岩手師範学校を卒業して、花巻の小学校の訓導になる。そのころ、新約聖書や内村鑑三の文章にふれてキリスト教に入信。ところが、僧侶である実父や養父は、彼の行動を許さなかった。キリスト教教育の実践をはじめた彼に教育界もまた弾劾の拳に出て、ついに斎藤は辞職に追い込まれる。

当時、内村鑑三は日露戦争に反対し、『万朝報』紙上で非戦論を展開していた。その影響を受けた斎藤も、尊敬する師の説にしたがい納税拒否、徴兵忌避も辞さずと非戦の決意を固めるようになっていた。

斎藤の決意を知らせる手紙を目にした内村は、東京を発って厳冬の花巻に急行する。…日露戦争が勃発する前年の冬である。師による必死の説得が続く。ついに翻意した斎藤は、翌日になって同信の者たちと内村の講話をきき、北上川河畔に遊んだ。世にあまり知られていない「花巻非戦論事件」のてんまつだ。」⁽⁴⁾

内村鑑三は1861生まれ(1930年死去)であるので、彼と斎藤宗次郎とでは、内村が16歳年長で

(2) 上巻、凡例より。

(3) 下巻、xi頁。

(4) 上巻、viii頁。

あるということになる。斎藤の同世代人をキリスト教関係者に探すと、山室軍平(1872-1940)、吉野作造(1878-1933)、逢坂元吉郎(1880-1945)等がいる。内村や植村正久(1857-1925)、海老名弾正(1856-1937)等を日本キリスト教の第一世代とするならば、斎藤等は第二世代であると言えることができるであろう。山室や吉野・逢坂等は、そのキリスト教思想や実践の面でも、前の世代から引き継いだものをさらに独自に展開させた人々である。そして斎藤もまた、内村から忠実に引き継いだ側面を色濃く持つ一方で、独自の要素をもったキリスト者であった。また彼は、塚本虎二(1885-1973)、藤井武(1888-1930)等、無教会の次世代指導者たちよりも上の世代にあたる。

先の引用文にもある通り斎藤は岩手県花巻在住であったので、斎藤が内村を知ったのは、内村の文章を通してのことであった。斎藤が内村へ送った最初の手紙は「日本国内に義人などいない」と嘆く内村に対して激しく反発する内容であった⁽⁵⁾が、斎藤は内村の著作を読み進める内に、次第に内村に傾倒するようになっていった。その交流の初期は手紙でのやりとりが中心であるが、札幌伝道の帰途盛岡に滞在していた内村を斎藤が尋ねた際に両者ははじめて対面した。1901年のことである。以後は斎藤が折りを見て上京することもあれば、内村が伝道旅行の際に斎藤のもとに立ち寄ることもあり、両者は親密な交流をするようになった。そして1926年、斎藤は内村に近侍するために東京に移住し、以後は講演会や「聖書之研究」誌の運営等、内村の伝道活動を手伝った。さらに内村の死後には、岩波書店版『内村鑑三全集』(1932-33年刊行)の編集実務委員を鈴木俊郎とともに努めている。

斎藤は「無教会キリスト者」というよりも「内村鑑三に導かれたキリスト者」との思いを強く持っていたように思われる。彼自身はカナダ・バプテストの宣教師から受洗しているが、しかし教会員でもないのである。また斎藤の娘多祈子も内村から受洗している。これらのことから、斎藤が無教会・無洗礼といったことを教条的にとらえていたのではないことが明らかであろう。そしてそれは内村の教会理解と概ね重なるものである。

斎藤は生前二つの著作を残している。『ある日の内村鑑三先生』⁽⁶⁾と、『花巻非戦論事件における内村鑑三先生の教訓』⁽⁷⁾である。また死後、斎藤の残した草稿をもとに出版された著作として『恩師言 内村鑑三言行録・一人の弟子による』⁽⁸⁾がある。いずれも、タイトルから明らかである通り、内村及び彼と内村との関係についての著作である。また斎藤自身の著作ではないが、斎藤の娘婿にあたる山本泰次郎による『内村鑑三と一人の弟子 斎藤宗次郎あての書簡による』は両者の関係を知る上で非常に重要な著作である。⁽⁹⁾なお、この「花巻非戦論事件」は、いわば内村と無教会の内部での事件であり、実際には上記引用文の通り、斎藤が直接行動に訴える前に内村の説得があったため、公に「事件」化することはなかった。

(5) 山本泰次郎『内村鑑三と一人の弟子 斎藤宗次郎あての書簡による』教文館 1981 7-8頁。なお、以下同書を山本と表記する。

(6) 斎藤宗次郎『ある日の内村鑑三先生』教文館 1964。

(7) 斎藤宗次郎『花巻非戦論事件における内村鑑三先生の教訓』クリスチャン・ホーム社 1957、牧歌社より1962再刊。

(8) 斎藤宗次郎『恩師言 内村鑑三言行録・一人の弟子による』教文館 1986。

(9) 素材は斎藤と内村の手紙であるが、あくまでも山本の目から見たものであることには留意が必要であろう。

内村における師弟関係

内村を「恩師」と称するところからしても、斎藤にとって内村との関係が「師弟関係」として捉えられていたことは間違いないであろう。彼以外にも内村の聖書研究会や講演会には多くの人々が参加していた。その中には当然、内村の弟子を自認していた者たちもいた。また直接彼の許に集った人々以外にも、「聖書之研究」誌の読者には、内村に私淑し心の中で彼を師として尊敬する者もいたであろう。では内村の側では、師として尊敬をうけること、あるいは師弟関係ということはどう考えていたのだろうか。

実のところ、一方の内村には「弟子をとりたくはない」との意識があるのである。ではそれは何故であろうか。まず根本的な理由として、師として仰ぐべきは、唯一キリストのみであるから、ということがある。内村が、彼を慕う青年たちを、正しく神・キリストへと導くことができるのであれば問題はないように思われる。しかしそこに「人物崇拜」が入りこむと、その青年たちはキリストではなく、内村に倣おうとしてしまうのである。神 人間という関係を絶対的なものと考え、人間どうし関係性は相対的なものにすぎないと考える内村にとって、人間が人間を師と仰ぐことは、神 人間の関係を歪めることにつながりかねないことなのである。斎藤の兵役忌避を諷めに来た際も、内村は言葉を重ねて説得にあたったが、しかしそれは説得であって命令ではなく、「今朝はあのように話したが、しかしもしそれが君の良心の命令であるならば、やりたまえ」と言ったという。⁽¹⁰⁾内村は自らの意志により弟子をコントロールしようとは思っていなかったのである。以下に実際の内村の言葉を引いておこう。

「人間の中に師として仰ぐべき人物を求めんとする者は必ず失望すべし、そは彼らの中に師として仰ぐべき理想的人物は一人も存在せざればなり、...」⁽¹¹⁾

「近頃に至り「先生のお顔なりと拝見せんと欲して参上致しました」と言ひて余を訪問する者が折々ある、余は斯かる人らに告げて言ふ「余は他人に見せる為の顔を有たない、また君等は人の顔を見たとして何の益にもならない 神を信じキリストを仰げば、それで人の顔を見る必要は全然無くなるのである」と、日本国に未だ人物崇拜が絶えない、甚だ歎ずべき事である、...」⁽¹²⁾

「自分の弟子と称する人で自分に真似る人のあるを知りて嫌悪に耐へない。自分に真似るならば自分の独立独創を真似て貰ひたい。自分は誰にも真似なかつた、故に自分の弟子と称する人は誰にも、その師と仰ぐ人にも、真似て貰ひたくない。...願くば小内村の一人も出でざらん事を。...」⁽¹³⁾

(10) 山本、105 頁。

(11) 内村鑑三「基督教と師弟の関係」、1900、『聖書之研究』1号、『内村鑑三全集8』288頁。本稿で引用する内村の文章は全て『内村鑑三全集』（岩波書店刊、1980-84、以下『全集』と表記）からのものである。なお内村の文章にはしばしば各種傍点やゴシック体等により強調されている個所があるが、本稿の引用文では、それらの強調は再現していない。また一部の漢字を現代表記に改めて引用してある。

(12) 内村「日々の生涯 12月17日」、1919、『全集33』189頁。

(13) 内村「日々の生涯 6月4日」、1929、『全集35』459-460頁。

このように内村は自分ではなく神・キリストを師として仰ぎ、そして人間関係においては独立的・自立的であるべきことを繰り返し述べ、また「先生」としてまつりあげられることを警戒している。そのように内村を「崇拜」する者たちは、彼に過大な幻想を抱いているに過ぎないのである。そしてその幻想が破れると、彼らは結局内村の許を去っていくことになる。

「余は余の生涯に於て未だ曾て一回も人に向つて「汝来りて余の弟子となるべし」と言ひて彼を余の許に招いた事はない積りである。然るに多くの人々は自から余を其先生と称して余の許に来つた。而して彼等が適當の礼を尽して余に来りし以上は、余は彼等の来るを妨げなかつた。其れと同時に余は屢々彼らに忠告して曰うた、「余は諸君の友人であつて師ではない、余の宗教に在りては師は唯一人キリストである。」…余は彼等が余を先生と呼ぶを許したのは先輩に対する敬語としてに過ぎない。余は彼らに余の師なるキリストを紹介せんと努めた。余自身が彼らの師表たり模範たりとは決して唱へなかつた。

然るに事實は如何と云ふに、余の此忠告、此努力は…裏切られたのである。余を先生と称て来りし者は大抵の場合に於ては余に於て各自の懐く理想の実現を想像して來たのである。

…唯余の行為又は思想の一面に憧憬れて浅慮にも一目散に走り来つて彼らの理想の偶像として余に縋りついたのである。」⁽¹⁴⁾

さらにこのような人物崇拜、あるいは幻想の底にあるものを、内村は見ぬいていた。それは自己中心主義である。他者に対して抱く幻想は、自己の裏返しとしてあらわれ出てきているのだ、と言うのである。ゆえにそれらの人々は、内村が彼等の期待通りの「師」でない場合、それを認めることができない。

「人あり私を先生と呼ぶ。私は彼が私の教を受けて呉れるのであると思ふて喜ぶ。然るにさうでないことが判明る。彼は私の教を受けんとするのでなくして、私をして彼の主義、主張に賛成せしめんとするのだ。彼は私を彼れ自身のダブル(映像)として解したに過ぎない。」⁽¹⁵⁾

「日本人にして自から人の弟子なりと称しながら其人に向ひて「我に斯く教へよ」と命ずる者が尠くない。彼等は斯く為して自ら師の師と成りし事に氣附かない。師たり弟たるは彼等の自由である、然れども弟たる以上、師に教へられんと欲し、師に教へんと欲してはならない。彼らはまた師の師たらんと欲する時は、先づ明白に己がもはや弟たらざる事を告白し、然る後に先きに師として仰ぎし人を教ふべきである。然るに此事を為さずして、自分は依然として責任輕き弟の地位に居り、責任重き師を誨え且つ指揮せんと欲す。此は不義であるよりも寧ろ卑怯である。…」⁽¹⁶⁾

(14) 内村「弟子を持つ不幸」、1927、『聖書之研究』325号、『全集30』390頁。なお内村によればこの原稿自体は1927年より以前に書かれた「古い原稿」という。

(15) 内村「近代人氣質二つ」、1928、『聖書之研究』338号、『全集31』272頁。

(16) 内村「師道の転倒」、1924、『聖書之研究』285号、『全集28』215-216頁。

後者の引用文からは、内村が師と呼ばれることを嫌がりながらも、同時に自らには導くものとしての責任があることを自覚しているということもまた伺える。師ではなく友人であると言いな
がらも、それは決して無秩序な人間関係、あるいは完全な平等主義を意味していたわけではない。
内村から学ぶべきものがある間は、ある種の師弟関係がそこにあるわけである。そのように考え
ると、先に引用した「弟子を持つ不幸」における、「先輩」という表現はなかなか当を得た表現
であると言えるのではないだろうか。先輩は教える立場ではないという点で師ではなく、ともに
学ぶ立場のものである。しかし同輩とは違い、後輩からは一定の尊敬をもって遇せられる存在だ
からである。そのような先輩 後輩的な秩序が、正しくまもられることを内村は求めていること
になる。無教会と言い、独立・自由を大事にしながらも、同時に内村は常に正しい秩序があるべ
きであると考えていた。

またここで内村が、「明白におのれがもはや弟たらざることを告白」すべきである、と述べてい
ることも注目に値するであろう。師弟関係、先輩後輩といってもそれは固定化されたものではな
く、変化していくものなのである。生きているものは変化し続ける、との思想が内村にはある。ま
た、神 人間という絶対的關係に対して、あくまでも人間の師弟関係が相対的な師弟関係にすぎ
ないからでもある。

「 師弟の關係について 余は人が何時までも余の弟子として存^{のこ}らんことを欲しない、彼が
余より学び得る丈けを学びし以上は、余より離れ、独立して神の器として働かんことを欲す
る...」⁽¹⁷⁾

さて、内村における師弟関係像は以上のように確認できた。では、実際の弟子である斎藤の、内
村に対する態度はどのようなものであっただろうか。これについては、山本泰次郎による「斎藤
が傾倒し熱中する恩師内村」⁽¹⁸⁾との表現がまさしく言い表しているように思われる。このような態
度は、例えば矢内原忠雄や金教臣のような次世代の無教会キリスト者たちが、内村のキリスト教
思想を自分のおかれた環境に適合するようアレンジして受け入れようとしたこと等と比べると、
ずいぶん直接的である。実例として以下に『二荊自叙伝』より斎藤自身の言葉を二箇所ほど引用
しておこう。

「聖書之研究十月号第二百七十九号を内村先生宅にて頂くことが出来た。...今や信者未信者
を問わず万人に賜りたる神よりの教書である。誰人も之を精読して生命に立ち還らねばなら
ぬ。」⁽¹⁹⁾

「『聖書之研究』の新号を受取った。之が日本国否世界の大産物である。」⁽²⁰⁾

(17) 内村「夏期雑感」、1920、『聖書之研究』241号、『全集25』515頁。

(18) 山本、13頁。

(19) 上巻、344頁。

(20) 下巻、14頁。

これらの熱烈な言葉は、確かに内村が危惧していたような人物崇拜的ニュアンスを伺わせるものでもある。さりとて内村が斎藤を遠ざけず、両者が「人もうらやむほどのうるわしい師弟の交り」⁽²¹⁾を続けたのは、斎藤の言葉に世辞の類などが含まれず、また自らの為に内村を利用しようとするような打算的なところも全く無く、誠実・率直に内村を敬愛していたからであろう。その斎藤に対する内村の態度について、山本は「斎藤がその激しい性格に加えて、思い立つやそのまま実践に突進してしまう直情径行のために、波瀾に富んだ生涯のうちに、しばしば信仰上の誤りを犯すのを、（引用者注：内村は）うむことなく、じゅんじゅんと教え、さとし、導く」⁽²²⁾と表している。内村の方でも、確かにこの敬愛の念を熱烈に示す弟子に対する深い愛情を抱いていたのである。

『二荊自叙伝』に見られる斎藤のキリスト教思想

続いては、斎藤が内村より学び受け継いだものがなんであったのか、ということを『二荊自叙伝』を通して確認してみたい。特にここで注目したいのは内村の独特なキリスト教思想がどのように斎藤により受け入れられているか、ということである。とはいっても、『二荊自叙伝』は日記的な記録文書であり、思弁的なものではないため、そこから読み取ることができる斎藤のキリスト教思想も断片的、感想的なものである。しかしその中にも内村から受け継いだと思われる要素と、斎藤独自のものであろう要素とが存在していることを見て取れる。山本が「激しい」「直情径行」と表現したように、斎藤の言葉は率直であり、また常に実際の行動・体験と結びついたものである。また斎藤の言葉には、内村のそれをさらに尖鋭化したような、よりラディカルなところが見られる。なおこれは、「無教会」ということの意味に関して言えば、内村の弟子たちの間で一般的に言えることでもある。内村にとっての「無教会」とは、贖罪信仰を中心としたキリスト教を追求した結果としてあらわれたものであって、教会はあってもなくてもいい、といったものに過ぎなかった。しかし若い弟子たちは「無教会主義」に強いこだわりをもっていた。故に、内村が札幌独立教会を援助しようとした際、弟子たちがそれを快く思わなかったといった事例などもある。前述の、斎藤の「花巻非戦論事件」にもまた同じようなところがある。内村の非戦論から導き出される理想主義的結果を斎藤がそのまま実行しようとしたのに対して、師である内村はより現実的に周囲を見るように諭したのである。しかし晩年の内村と弟子たちとの間で、前述の無教会主義に関する見解の違いなどから次第に溝ができていったのに対して、斎藤はこの体験を通してますます内村に傾倒するようになったという点は対照的である。

斎藤が内村から受けついでキリスト教に関する要素としては、まず当然ながら無教会主義ということが挙げられよう。その特徴は、組織としての教会は持たず（とはいえ、教会を全く否定するものではないが）、教義や儀礼については無頓着であり、聖書中心、贖罪信仰を重視すること（従って人間の罪性が強調される）等である。これらは全て斎藤のキリスト教にもあてはまるものであり、彼による礼拝・家庭集會も、賛美・祈祷・聖書朗読と所感、といった無教会流で行われ

(21) 山本、9頁

(22) 同前。

ていたようである。また、それ以外にも内村から受け継いだ特徴と考えられるものとして、実験（体験・経験）主義であること、天然（自然）に神の働きを見出すこと、道徳的には厳格であること、人間中心的な近代物質文明に対する批判、等が挙げられる。ただし、斎藤は単に内村を受け継いだだけではない。花巻非戦論事件での徴兵拒否にもあらわれているように、斎藤には彼独自の、内村よりもさらにラディカルな、思想をストレートに行動へと結びつけるところが見られる。それは特に他宗教に対する批判等に鋭くあらわれている。では以下、具体的に斎藤による記述に沿って見ていくこととしよう。

聖書解釈

まず無教会主義の中で最も重要であるとされる聖書の解釈における両者の比較である。斎藤による聖書解釈と、内村のものとはどのように異なるであろうか。以下、詩篇三十一篇一節に関する両者の言葉を用いて見てみたい。斎藤は次のように述べている。

「エホバ天の父よ！と御名を呼び奉った。これは必要である。御父に対する切なる心の発願である。熱心である。礼儀である。我らは赤誠を以て鋭く御父の御名を呼び奉り御胸に強く響き渡る様にする事が肝要である。われ汝に寄り頼む。只汝にのみ依り頼む。我等の依り頼むべきものは他にあるなし。只独一の御神にのみ頼り縋る。

御父の御名を呼び奉るは眠り給うを呼び起すのではない。不注意に在し給うを呼び立たしめ給うのではない。我の無能無智を悟って其御力に寄り奉らんが為に我を進む時の呼び声である。…愧をおわしめ給う勿れ。何れの日までもと罪人の汚名を負うて何時までも残るは滅亡の証である。何れの日までも最後の日までである。片時も早く我を救い潔め給うて愧を負わしめ給う勿れである。…

斯く祈る者は幸である。エホバは己を呼び求める者を決して捨て給わぬのである。」⁽²³⁾

一方同じ箇所について、内村は次のように述べている。

「詩篇三十一篇は祈祷である。祈祷と云ひて単に祈願でない、神との対話である。…神聖なる密室の睦語と解して其意味は判明であらう。信仰と云へば公けに発表せらるべきものとのみ解するが故に、聖書の内に解し難い事を許多見るのである。信仰は神と靈魂との親密なる交際である、故に其内に他人の覗ひ知る能はざる所のものが多いのである。…

其発端の一句が異常である。

エホバよ我汝に倚頼む

願くは何れの日までも愧を負はしめ給ふ勿れ

と。此場合に「愧を負ふ」とは何を意味する乎。…エホバに倚頼み、彼れ救拯すくいを施し給はざれば、信頼を裏切られて、我れ自身は失望し、人も亦我が信仰を嘲るに至らんこと、是れ信

(23) 上巻 42-43 頁

者が最も恐るゝ愧である。神に我が信仰を裏切らるゝ事、信者に取り斯んな苦しい事はない。...エホバよ我れ汝に信頼せり、願ふ何時々々までも此信頼を裏切りて、我を絶大の失望に沈ましめ、又我敵の嘲笑の的たらしめ給ふ勿れとの祈祷である。...此は我が幸福のみならず神御自身の御名譽に拘はる問題である。「私の祈祷を取上げ給はず、私に愧を負はして、貴神御自身の聖名を流し給ふ勿れ」との言である。...神と最も親密なる関係に於て在るにあらざれば発する能はざる言である。」⁽²⁴⁾

内村の文章が『聖書之研究』誌に公に発表されたものであるのに対して、斎藤のものは基本的に自分自身に向けて書かれたものである。それゆえ内村のように伝道的な配慮はせずともよく、また聖書学的な立場をとる必要もない。そのように背景が異なる以上、ニュアンスに差が出ることは当然であるのだが、信仰をよりよいものとするために研究・知識が必要である、という内村のスタンスと比較すると、斎藤の言葉は素朴であり、また感情を非常にストレートに表現するものである。しかしその信仰の内容は内村の影響を強くうかがわせるものであり、例えば斎藤が繰り返す「神に頼る」との態度は、内村が自らの回心体験を通して身につけた態度を受け継ぐものである。内村の教える「神との親密な交際」を斎藤は実践していると言ってもよいであろう。

礼拝作法

続いて、具体的な礼拝作法、無教会式礼拝についての斎藤の言葉を見てみることにしよう。斎藤は基本的に毎日曜日自宅や信仰を共にする仲間の家で礼拝を行っており、これについては『二荊自叙伝』にも多数の記述がある。

「我等に与えられる集会は極めて簡素なものである。同信の人であれば其誰、彼を選ばない。所を選ばない。時間を選ばない。虚心に霊を盈たしめ、教えらるゝまゝ導かるゝまゝに為すのである。...我等は讃美と祈祷の外には聖言其儘を拝聴して直接に聖霊の啓示に沐せんとするのである。」⁽²⁵⁾

このような形式は内村の家庭礼拝、小集会の形式と共通である。無教会主義というあり方は信仰をどのように表現しようとも全く自由、といったものではなく、聖書を中心とした、ある意味で「教会のエッセンス」的なものである。決してアンチ教会というわけではない。ただし、神の働きをどこに見出すかという点で、内村の無教会主義は、教会という仕組みがどうしても必要であるとは考えない。内村は、神に造られた世界そのもの、宇宙そのものが教会である、といった表現もしているのである。

(24) 内村「詩篇摘要（二） 詩篇第三十一篇」、1929、『聖書之研究』344号、『全集32』69-71頁。

(25) 上巻、265頁。

自然神学的要素

このような、自然のうちに神の働きを見出すことによる、自然への強い愛着も内村流である。ただし斎藤の視点・記述は内村に比べて非常に叙情的あるいは情緒的なところがある。その点に関しては、自然科学者を自認し、信仰と科学が合一するようなあり方を求めた内村とは対照的である。後年斎藤の上京後に、内村は斎藤に対して「君は芸術家だから形容が多すぎる。もっと事実を書かなければいけない」と注意したという。⁽²⁶⁾

「鳴く鳥の音色について考えた。誰人にも関係深き二、三種を選んで見るに、鶏の声は警醒的である。暗き狭き室から之を放っている。鴉の声は倡和的である。大空から之を放っている。雀の声は歓喜的である。樹間から之を放っている。去れば人間生活と鳥の音色と時間との関係の密接なるものがあると考えられる。神の御心の如何に深遠であるか、其愛は如何に濃厚であるかを拝察せらるゝのである。」⁽²⁷⁾

「此日緑濃き藻草の流れ緩やかなる河水の中に靡き居るを見た。夕陽の光線が雲漢を漏れて経塚山麓を射、六原の雪原を掩うの壮大なる光景を見た。…心して自然界に眼眸を投ずれば寸景の間にも無限の神意を読んで感謝に溢れざることはない。」⁽²⁸⁾

また斎藤の独自性は、労働行為に対してもこのような自然神学的とでも形容可能な見方をしていたことにもあらわれている。花巻時代の斎藤は労働・作業の中に神の働きを見出し、そこに喜びを感じていたのである。一方で、言わば職業的な伝道者であった内村は、労働の重要性を説きつつ、例えば農業のような実際の労働の現場に自らをおくことはできなかった。ここでも斎藤は彼の教えを実践した形になる。

「待合室の一隅に膝を折って新聞を置く。此時正にイエスを見イエスを感じなければならぬ。…凡ての時凡ての事に於て斯くあるは真に、生ける信仰生活である。」⁽²⁹⁾

「駅に向い走るも楽しい。列車の到着を待つも楽しい。新聞の許多の荷物を持ち出すも楽しい。…靴を脱ぎて炬燵に凭り新聞を繙くも楽しい。是れ偏に主の与え給う所の楽しみである。予は深く天国を待ち望めども此世の生息をも感謝するものである。」⁽³⁰⁾

「雲を見ることは楽しい。…其色彩と形態の変化と気温との関係と日月星羅碧空緑葉との調和等を発見して神の意匠を認め更に進んで神の愛を探り終感謝と讃美とを以て結ぶようにならなくてはならぬ。科学でも芸術でも実業でも政治でも其極致は神の智能愛を探る為である。人は折角智識や能力を与えられて居ながら、それは自分の修養努力に拠るなど己惚れたり利慾の為に乱用したり憤怒憎悪の念の発表の具に悪用したりして恩恵の泉なる神の御心を感じ

(26) 山本、333頁。

(27) 上巻、241頁。

(28) 下巻、172頁。

(29) 上巻、142頁。

(30) 上巻、232頁。

謝せねば終には自縄自縛、身も霊も滅亡に陥って仕舞うのである。文明国であるとか文化生活であるとか称して信仰を度外視し神恩を無視する全世界の人々は一日も早く此汚濁の境を脱しなければならぬ。」⁽³¹⁾

天然の美に神の働きを見出すのは内村と共通であるが、このように人間の行為を通しそこに積極的に神の働きを感じようとする態度は内村にはあまり見られないものである。内村の場合は神に従う、とのニュアンスが強く、人間の自発性にそれほど重きをおかないとも言えよう。また内村は、神に造られたままの美しさを保つ自然と、墮罪した人間との間に一線を引き区別して見ているところがある。しかし斎藤は、二番目・三番目の引用文からもわかるように自然と人間とを同一線上における関係として捉えているように思われるのである。

文明批判

また先の引用文に現れた近代文明・物質文明批判も内村と共通する要素である。さらに以下に見るような文学や演劇に対する批判などは内村からそのまま受け継いだかのようなものであり、「下等な人間」「馬鹿気きった」等、斎藤の言葉は内村に比してもさらに激情的なほどである。また、以下に見られるような相撲や産児制限に対する批判などは、内村には見られない独特なものである。山折はこのような斎藤の態度をして「原理主義的で融通がきかず、ちょっと窮屈な人」⁽³²⁾と評している。なお内村はとうとうマルクス主義と正面から向き合わねばならない状況にはならなかったのであるが、斎藤はマルクス主義について、無神論だからという理由ではなく、それが「人道を没却」させていること、つまり本質的な人間観に問題性を見出すが故に批判している。

「近頃児童劇ということが流行り出した。これは我国現代の軟文学者坪内逍遙氏が始めたのである。下等な人間というのは困ったものである。此事が大切な児童の天真なる天性の發育を阻止し非精神的なる怯弱偽善虚礼の人となし、^{やが}聽て国家社会の衰滅を招来するに至ることに気がつかぬであらうか。」⁽³³⁾

「東京両国で相撲共は騒いで居る。…一体人と生まれて体力を競うことを職業にして居るとは余りに馬鹿気切ったことである。…一日も早く相撲という一種の職業を廃止したいものである。」⁽³⁴⁾

「有島武郎氏の秋子との情死は罪の悲惨事というの外はない。愛云々などいへど背教の社会主義的思想家に真の愛がわかる筈も有る筈もない。^{めつき}鍍金せる俗情に過ぎないのである。」⁽³⁵⁾

「戦闘を喰ふニイチェの哲学思想、人道を没却せしむるマルクスの経済思想、高潔を無視する文士の恋愛観、サンガー夫人の産児制限、其他舞踊、演劇、活動写真、労働運動など何れ

(31) 上巻、479 頁。

(32) 山折哲夫、2005 年 3 月 9 日産経新聞コラム「凜として」。

(33) 上巻、194 頁。

(34) 上巻、212 頁。

(35) 上巻、288 頁。

も人類の墮落を招くもの。此等が次第に其勢力を揮うに至る時我等は自ら警戒すると共に聖書の預言の真実なるを悟り主の日の為に日夜備うる所なくしてはならぬ。我等神の選びに預かりし者は何事からも益を受けつゝあるのである。」⁽³⁶⁾

このような当時の日本文化に対する批判は、日本の伝統宗教である仏教や神道にも向けられる。ただし神道に関しては宗教としての神社の神道に対する批判であって、斎藤は文化文明に対して向けるその厳しい視線によって、国家神道・天皇制の問題性を捉えようとはしなかったようである。内村には同じ宗教者として、特に浄土系の信仰に対するシンパシーが見られ、また「仏教は仏教として発達せしめよ」といった寛容な（あるいは無頓着な）態度があるのであるが、それに比較して斎藤の他宗教に対する批判は手厳しいものである。斎藤自身が禅宗の寺の生まれであり仏教を内側から見てきたこと、キリスト教入信にあたって仏教界をはじめとする地域社会から非難攻撃を加えられたこと（法事や祭礼等への参加を一切拒絶したという斎藤の非妥協的態度もまたその一因であったであろう）内村が拠点とした大都市東京とは異なる地方都市花巻の状況、等がその理由として考えられる。例えば暁烏敏に関して、斎藤は以下のような言葉を残している。

「松任、明達寺の暁烏敏氏から『葉王樹』十一月号が送って来た。巻頭より巻末に至るまで氏の信仰思想主義を率直に抒してある。氏自身に取っては或は一貫し徹底して居るかも知れぬが、真理の目より見んには未だ波浪の途中に浮いて居るものであろう。予を以て見れば一種の浅き哲学とほか思われない。信仰の根本と称するものゝ表白を窺うことは出来ない。矢張親鸞をして言わしめば“異安心”たるを免れまい。」⁽³⁷⁾

「近頃暁烏敏氏は盛岡に見えて盛んに講演をやられたようである。…随分可愛らしいことを語って居られるが未だ天地を貫く真理に触れて居らぬ所は不憫である。キリストは好きだがパウロは嫌いだなどと言う点は、何を言うのかと言いたい程である。真にイエスキリストを好きになれば必ずパウロをも好きにならなければ本当ではない。少くとも信仰上の見方感じ方でない。」⁽³⁸⁾

暁烏敏は浄土真宗大谷派の僧侶であり、宮沢賢治に対しても影響を与えたと言われている人物である。またここで言及されているように聖書に一定の理解を示すなど、その排他的でない態度は評価されてよいように思われる。しかし斎藤はそれを全く評価しないのである。斎藤の方が排他的な面を持っていると言わざるを得ないであろう。そして同じような態度は、日本の伝統的宗教行事に対しても見られるのである。

(36) 上巻、408 頁。

(37) 上巻、349 頁。

(38) 上巻、175 頁。

「今日は陰正月元日である。

憐むべき真に憫むべき愚民の群は夜半より御き出で、諸方の神社を礼拝し廻って居る。之は誠実敬虔の信仰に出でしものではない。悪魔の誘惑に乗って其霊を偶像に献げしむる形式を執るまである。

相当の教育を受けし者まで此挙を敢てするは憐むべきことである。…何時の時代になっても偶像拝跪は止まぬことであろう。…」⁽³⁹⁾

いくらこの文章が日記としての性格が強く、当時公にされたものではないとはいえ、「愚民」「憐れむべき」とは言葉が強すぎるのではないか。とても寛容であるとは言い得ないであろう。斎藤の言動に触れ、彼を人格者として尊敬するに至ったという周囲の人々の方がよほど寛容であるとの言い方もできる。

このように斎藤は日本の伝統宗教に厳しい批判を行う一方で、キリスト教の既存教派に関しては内村同様無頓着であるといつてよい。彼自身が受洗しているほどであり、どうしても無教会でなければならぬ、といったところはない。斎藤にとって無教会とは、主義主張であるというよりも、内村の教えであったのである。ただし、どの教会教派も同じであると考えていたわけではない。以下の引用文はキリスト教について尋ねるべく斎藤のもとを訪れた青年に対する斎藤の答えの一部である。

「…日曜日を清く守り霊肉の上に恩恵を頂くこと、教会に行くなら組合にあらで日本基督が浸礼はよからんと注意した。」⁽⁴⁰⁾

このように斎藤が、組合教会は勧められないと考えていることは興味深い。ただしその理由についてはここで斎藤は述べていないので、読者が推測するしかない。恐らく組合教会の神学的な面における自由主義に対して疑問を抱いていたのではないのだろうか。あるいは、政治的な面における国家体制と結びつきの朝鮮伝道などのあり方も斎藤は意識して、批判的に見ているのかもしれない。無教会というあり方自体は、伝統的な教会のあり方と比較すれば異端に属するようなものであるが、内村のキリスト教理解そのものは非常に伝統的なものであり、斎藤もそれを受け継いでいると言える。

まとめに代えて

斎藤が内村の手助けをするために上京したことについて、内村は感謝しつつ、斎藤が上京したことにより花巻から一人の優秀な伝道者が失われたことを残念に感じてもいた。斎藤がその情熱の全てを内村に傾けようとすることは、内村にとってもいかにも勿体無いことに思えたのである

(39) 上巻、233 頁。

(40) 上巻、493 頁。

う。内村にしてみれば、斎藤は内村のために働くのではなく、神のために働くべきである、ということになる。

内村の死後、斎藤は自らの集団を率いていくようなことはしなかった。内村は生前から弟子たちを独立させたがっていたのであり、その点では斎藤が内村の事業を引き継いだとは言いがたい。しかし、医療施設の慰問を積極的に行う等、斎藤が地道な伝道活動が続けたのも確かである。そして本書を含む著述や内村の著作をまとめる作業を通じた間接的な伝道活動により、現在にまで影響を与えているとも言えるだろう。その点ではやはり斎藤は自分なりのやり方で内村から学んだキリスト教精神を広めた、とすることができる。さらにそれらは詳細な歴史の記述でもあり、キリスト教研究だけにとどまらない資料的な価値を有している。

『二荊自叙伝』編者の一人である山折は、斎藤に関して産経新聞紙上で連載したコラムの中で、「いまの日本の教育の欠点は横並びの平等意識。…横並びの水平軸に対して、師弟関係という垂直軸を立体的に交差させる。そういう教育システムを復活させなければならない。そのことを教えてくれるのが、鑑三と宗次郎の関係だ」⁽⁴¹⁾と述べている。しかし、ここまで見てきた限りでは、内村・斎藤の関係は「教育システム」化できるような師弟関係とは一線を画するものであるように思われる。あるいは、内村・斎藤の関係を「復活」させるべき「いまの日本」に欠けたものとして捉えることは果たしてどうなのであろうか。明治～昭和期にかけて、そのような「師弟関係」が果たして一般的なものであったのか。斎藤という得難い弟子を得、さらに斎藤だけでなく矢内原忠雄、南原繁、政池仁等の人物を門下から輩出し、むしろ客観的には弟子に恵まれたように見える内村でさえ、全体としては「弟子を持つ不幸」を語らざるを得ない状況にあった。実際、斎藤の記述からは確かに「内村崇拜」的なニュアンスを感じ取ることができる。

この二人の関係は、やはり内村鑑三と斎藤宗次郎という個性の強い二人の人物における固有の関係であったと言う方が妥当であろう。そして内村・斎藤にとっての「垂直軸」があるとすれば、それはやはり神 人間の軸以外に考えられなかったのではないだろうか。内村が繰り返し「自分ではなくイエスこそが師である」と訴えていることを忘れてはなるまい。今我々が学ぶべきものがあるとすれば、そのような絶対的宗教性により師弟関係もシステムも相対化してしまうようなあり方なのではないかと思われるのである。そこには、ただ神と個人との関係があり、そしてその神との関係を媒介として、個人と他者との関係が浮かび上がることになるのではないであろうか。それは横並び意識などではなく、文字通りの「神の前での平等」であるはずなのである。

(なお、本稿の執筆に際して、斎藤宗次郎の孫娘に当たる児玉佳與子氏により多くの有益な示唆をいただいたことにここで感謝したい。)

(いわの・ゆうすけ 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(41) 山折、前掲コラム「凜として」)